

個人から観たアイヌ観・アイヌ民族としての私個人

8月10日(水) 14:40~16:10 釧路会場

講師 平澤 隆二 阿寒アイヌ工芸協同組合営業係長

皆様、こんにちは。平澤隆二と申します。よろしくお願
いいたします。

まず、私がどんな人間か自己紹介を兼ねて、最初にお話
をさせていただきます。

私の住む阿寒湖アイヌコタンは、阿寒湖畔にあります。
阿寒アイヌコタンには、年間、20万から30万人、阿寒湖
全体では約80万から100万人位のお客様にきていただい
ているそうです。そのうちアイヌコタンで踊りをご覧いただ
いているのが約10万人位ですので、あまりメジャーな観光
地ではないといえるかも知れません。旅行業者の添乗員さん
も、あまりアイヌコタンを知らないということですので、
本当に知られていないというのが事実かも知れません。そ
の阿寒湖アイヌコタンで、主に舞踊と事務的な仕事を担当
しております。

勤め先は、阿寒アイヌ工芸協同組合という団体です。組
合の「オンネチセ」と呼ばれる施設で、主として観光で訪
れた人たちに、アイヌ古式舞踊を公開しています。平成5
年5月に、古式舞踊の踊り手として採用されました。現在
では、小・中・高校生に対する講話と、事務的な仕事を全
般的に担当しております。

今このように、自分がアイヌ民族について、数多くの皆
様の前で話をするのはおこがましいことですが、その反面、
これは持論ではあるんですけれども、物事はすべてのこと
が偶然ではなくて必然的な結果として現在があると、私は
思っているんです。私はあるきっかけで、「俺はアイヌのこ
とを知らなければならぬんだな」と、思いました。

かくいう私が今に至るには、祖父の多大な影響がありま
した。私の祖父は日川善次郎といいますが、平成2年に白
老のポロトコタンで、イヨマンテ 熊送り儀礼が行われた
際に、祭司として招かれました。当時、祖父は伝統的な熊
送りの儀礼をほぼ正確に伝承している数少ない一人でした。
そのちょうど1ヶ月に私は、旭川での仕事をやめて阿寒湖
に戻ってきており、付き添いとして一緒について行かない
かと祖父にいわれたんです。

何も手伝うことなく、祖父の付き添いとして、私はイヨ
マンテの儀礼を観察することができました。アイヌの儀礼
や催事などは、小さいころから遠巻きには見ていたんです
けれども、物心がついてから実際に体感したのは、白老の
イヨマンテが初めてでした。日川善次郎は、私にとって普
段は普通のじいさんですから、あんなに真剣な態度で神々
と向き合っ、神々しくどこか誇らしく思えたことはありません
でした。

アイヌの言葉や儀礼、習慣などは地方によって多少の違
いはありますが、この平成2年にポロトコタンで行われた
イヨマンテは、記録を保存し、日高地方出身のアイヌのじ

いさんから学べることを正しく学んで、白老地方の文献や
資料を掘り起こすなど、より多くの情報を収集して、白老
地方の伝統的なイヨマンテの再現を長期的計画として行っ
たものでした。

今だからわかることですがけれども、じいさんがアペウチ
カムイ(火の神)に、またエペレカムイ(子熊の神)に対
して失礼のないように、そして今行われている儀礼が何事
もなく滞りなく終わりますようにと、謙虚に心から思う気
持が自然と私に伝わってきたんだと思うんです。アイヌ
の儀礼の場合、祭司は、仏教でいうところのお坊さんであ
り、キリスト教の神父・牧師さんであり、神道では神主さ
んの役目であるわけですから、アイヌの神々に対して失礼
にならないように、儀礼を取り仕切るのは当然といえば当
然なわけです。

そのときのイヨマンテの儀式は、まさに村を挙げてとい
う感じで、団子づくりや酒づくり、道具づくりなどが行わ
れました。カムイ(熊神)を解体するときは直視できなく
て、解体された後を見ただけでも、ちょっと貧血を起こし
そうでした。文化祭や夏まつりなど、地域で開催されるイ
ベントなどに参加された経験のある方にはおわかりいただ
けと思いますが、何かをなし遂げたり成功させたりした
ときの達成感や充実感は本当にはかり知れないものがある
んですが、まさにそのときに白老の人たちの活気に満ちあ
ふれた、生きたアイヌ文化に触れたということは、今の私
にとって本当に言いようのないよい経験だったと思います。

ただただ、じいさんの付き添いとして、この生きたアイ
ヌ文化に触られたということは、私のアイヌへの分岐点
の第一歩だったと思います。現在では、アイヌの伝統的な
催事や儀礼、生活習慣などに、アイヌであるからといって
そう簡単には間近に体験することはほとんどないわけです。
そういった意味では本当に貴重な経験をさせていただいた
と思っています。

以前、白老の方に会ったときに、このイヨマンテの儀礼
の話で盛り上がりまして、その白老の方がうちのじいさん
が生きていたときに、「前回は今回も花矢を放つときに必ず
小雪が舞ったなあ。」と、じいさんに聞いそうなんですね。
イヨマンテは、約2年近く村で育てた子熊を神々の国へと
送る儀礼ですが、そのクライマックスのときには、明け方
近くですが、主に東側にある祭壇の前方の方から、神々の
国があるとされている方向の裏手の空に向かって、子熊が
帰る道しるべとして、特別な弓や花矢が放たれるのですが、
そのとき、必ずといっていいほど、雪が降るんですね。

じいさんは、「カムイが神々の国に帰るときには、そのカ
ムイの後に悪い神様がついていこうとする。もし、悪い神
と一緒に神々の国に行くと、子熊がいた村に舞い降りて、

悪さをしようとするので、小熊の神が悪い神々が自分の後をつけて来られないように、足跡を消すために雪を降らせるのだ」と、説明したそうです。その話を聞いたときに、本当なのかな、嘘なのかな、じいさんって詩人みたいだなっていうふうに感心しました。

ちょっと長々とお話ししましたが、こういった経験からアイヌ文化にちょっとした誇りを持つようになった結果、平成5年5月、阿寒アイヌ工芸協同組合に就職させていただきました。

最近インターネットでの問い合わせ、小・中・高校生などの授業等による質問・疑問などにお答えするような仕事を担当しておりますが、今までの十数年間はもっぱらアイヌの古式舞踊の公演に携わってきまして、それ以外の生活では、全くアイヌに携わらずに生活してきたわけです。ですから、私のアイヌとしての先人の知識や知恵は、先ほど述べた白老で経験した3日間、ここ約十数年間に参加した他地域での催事・儀礼や、阿寒アイヌコタンで行われている催事・儀礼での体験 数多くはありませんが、そして、今まで読んできた数十冊の本から得たものです。

平成7年頃にこんなことがありました。組合でアイヌ生活記念館という施設を運営しており、そこには説明員がいるんですが、ある日、その説明員のかわりに留守番をしていたら、民族学専攻の大学生が卒業論文製作のために訪ねてきたんですね。約1時間半ぐらいの間、質問攻めにあいましたが、ほとんど答えられなかったんです。展示品の前には説明文が添えられているので、学生が帰った後には、質問に関係する展示品の説明文を読み返してみると、この学生、私に何を聞いたかかったのかなってという感じで、本当に民族学専攻の大学生は恐ろしいなと思ったことがありました。

今、仕事の合間を見て、いろいろと勉強しておりますが、あのときの学生が持っていた知識には、まだ遠く及ばないかも知れませんが、もう一度あのような場面があったときには、今度は相手が納得できるような会話ができるといいなと思っています。また、私が祖父の影響でアイヌ文化に取りくめたように、将来、私自身がほかの人に何らかの影響を与えることができるじいさんになれればいいなとも思っております。

人に影響を与えるといっても、今の私には知識も少ないですし、経験も数多くありません。読んだ本の内容は本当に片っ端から忘れていくような状況で、では今の私に何があるのかというと、踊りがあるじゃないかと思うんですけども、阿寒湖には踊りが上手な人がたくさんいて、比較されるとつらい気持ちにもなってきますが、今のところ少し自分に自信が持てるのは踊りしかないかなと思っています。アイヌの踊りは、大まかには奉納舞踊と娯楽舞踊の二つに分けられるといわれておりますけれども、自分が仕事で司会を務める古式舞踊公演の解説のときに、北海道に伝わるアイヌの踊りは全部で約200種類と説明していますが、私自身、そのような資料を全く見たことがないですし、そんなにたくさんの踊りを把握しているわけでもありません。そういうわけで、北海道に住むアイヌに関するさまざまな

情報、こういう体験談など、あまりにも多くのキャッチコピーとあいまいな情報の垂れ流しで正確さに欠けており、ほとんど現実をとらえていないわけです。観光業においても同様で、不適切な情報の提供を長年にわたり垂れ流してきたわけです。その結果、北海道に観光でお越しただくお客様のなかには、私たちが本当に不愉快な思いをするくらい大きな勘違いをしてくる方がたくさんいまして、ときにはいまだに穴の中に住んでいるんですかとか、何を食べて生きているんですかとか、毛皮は着ていないんですかとか、本気で聞いてくる人がたくさんいます。

最近、知りたい情報も雑誌やパンフレットを手に入れなくても、ある程度インターネットで集められますが、数年前にこんなことがありました。仕事の関係で白老のポロトコタンの情報を検索していたところ、日記風のホームページを見つけたので見てみると、4月に支笏湖に行ったところ、オフシーズンで観光船は割引料金で得をした気分だった。支笏湖の後はバスに揺られ、お決まりの白老観光。白老のアイヌ民族博物館は、アイヌの集落を再現したところでした。ところが、白老のアイヌは観光かぶれでした。土産屋の商売根性といったら大変なもので、大自然の北海道のイメージを完全に壊されましたと、こんなふうにホームページに載っていたわけです。

「観光かぶれしたアイヌ」「土産屋の商売根性といったら大変なもの」「大自然の北海道のイメージを完全に壊されました」というようなホームページを、もし皆さんが何の情報もなくご覧になった場合、どういう気持ちになるか。この情報は、確かに個人の情報ですけども、この大変な勘違いも確かに情報です。そのイメージを与えているのも確かな事実だと思います。

ここでちょっと補足させていただくと、このホームページでいっているような白老の民芸品が立ち並んでいる区域と、アイヌ民族博物館のある区域が同じように思われますけれども、まったく別な組織で、もしこのときに民芸品店側の方とお客様とが何らかのコミュニケーションを持ち、同じくアイヌ民族博物館の方ともお話しする機会を持っていたとしたら、こういうような結果は出なかったのではないかと思います。大変難しい問題です。

少し関係のある話で、バスガイドさんからのメールだったんですが、アイヌの人が彫っている指輪で恋を成就させるものがあると聞いたので紹介してほしいという問い合わせがありました。実際にはそのような指輪はありませんね。今、ホームページで「アイヌ」と打ち込んだだけで気の遠くなるような数が出てくるんです。その中には私も感心するような内容のものもありますし、ちょっと首をかしげるようなものもたくさんあります。

こういったようなことがありますので、北海道のアイヌが現在どのような状況にあって、どこに行けばどのような情報が得られ、どんなことが行われているかという情報を正確に伝えられるように、現在、各地のアイヌが構成する観光団体と北海道観光協会本部・支部が一丸となって基幹整備を行い、その第一歩を踏みだしたばかりです。

ちょっと話は変わりますが、阿寒湖には第1回さっぽろ

雪まつりが開催されたときと同じ年に誕生したお祭りがあるんです。さっぽろ雪まつりほど有名でもなく、集客力もなくて、本当に閑散としておりますけれども、「阿寒湖まりも祭り」というのがあります。第1回は、昭和25年10月7日、阿寒湖のまりも愛護会、阿寒国立公園観光協会、阿寒村、北海道教育委員会釧路国事務局、阿寒湖のまりも保護対策委員会が共催して開催されています。今年で56回目を迎えますが、道東の観光を支えるとともに、アイヌの伝統文化の伝承・保存を根底から支えたといっても過言ではないお祭りだと私は思っております。また、伝統は勝手に生まれるものではなくて、つくり育てるものだとすることを改めて考えさせられるお祭りだと思っています。

阿寒町民にとってはお祭りであっても、阿寒湖アイヌコタンの住民にとっては神事であり、祭事なわけです。祭りの約1週間ほど前ぐらいになると、山に柳の木をいただきに行きます。イノウ(木幣)の材料です。アイヌ語で柳は「スニ(水っぼい木)」といいます。イノウをつくる時や、山に入るときには「イノウニ イノウをつくる木」と呼ばれます。

まりも祭りが開催されたきっかけというのは、まりもの絶滅を危惧した地元の有志たちが、阿寒湖から持ち去られたもの、また盗難されたもの等の返還運動を呼びかけたそうですね。戦後の北海道観光ブームの時には、阿寒湖温泉にも観光客が数多く訪れて、持ち帰る人、また隠れて売りさばくホテルの従業員とか民芸品店、網を持ち込んですぐわせる観光船の船頭などがいたそうです。さらに、電力発電などのダム建設による水位の変化、木材運搬のための「鉄砲流し」、台風などが影響したそうです。そうして、昭和25年、有志たちが集って返還運動が展開されたそうです。

私はまだ生まれておりませんので、詳しくは説明できませんが、まりも祭りを開催した当初は、研究者や報道関係者から、まりもとアイヌ民族は全く関係がないなどというような批判を受けたそうです。また、数多くの抗争があったそうです。まりも祭りの開催に功労のあった山本多助エカシ 私の尊敬するエカシで、もうお亡くなりになった方ですけれども、1990年、『まりも祭り40周年記念誌』作成の折に、四宅豊次郎氏と対談したときの発言として、『まりも祭り50年のあゆみ』阿寒湖アイヌ協会が編集したものです。の中でこう書いています。「何も古来からなかったといって、祭事をつくってはならないということはない。世界のいかなる国においても、大昔の人々は何か重要なことを祈願することがあって祭式をつくり、それを永々と受けついできたに違いない。マリモ祭りの場合、自分は最もよきアイヌの理解者であり友人であった丹波節郎氏(元釧路公民館長)や、その他の心ある人々や、地元の有志と相談しておこしたことから責任をもつ。最初はみんな返還されてきたマリモを湖に送り還すという単純な発想だったが、俺は、どうせやるならアイヌ民族のもっている自然崇拜の思想をこめて、1年に1度くらいマリモを通して大自然に感謝するのだと考えて、これまで儀式の中でやってきたのだ。だから、カムイノミ(神への祈り)の詞でも、一度だってマリモを神様といったことはない」(原文

のまま)と。

また、同じく『まりも祭り50年のあゆみ』の中に、「第一代目の司祭主である舌辛音昨エカシをはじめ、二代目の志富宗作エカシ次の日川善治郎エカシ、そして現在の秋辺今吉エカシとつづく長老達の、真のアイヌ精神を伝えてきた単純明快な言葉を、もう一度かみしめてみたい。マリモは阿寒共有の財産である。アイヌも和人も大自然の恵みに感謝し愛護精神をもって、マリモ祭りをつづけてゆくことだ」(原文のまま)とあります。

確かに、今では観光低迷期のイベントの集客キャッチコピーとして、アイヌと踊りが連動してコピーされることにより、阿寒湖周辺の民芸品店やホテル、また私たちの住むアイヌコタンにとって経済的効果が大きいかと思えます。

先ほど、町民にとってはお祭りであるけれども、アイヌコタンの人々には神事・祭事となるといいました。私たちのような観光業で生活する者も自然の神々に見守られて生活していますし、阿寒湖に生息するまりもなくしては本当に生活が成り立たないわけです。

ただ今では、特別天然記念物になって国に保護をされているまりもであっても、開催当時の趣旨とはまったく違った祭りになったといっても、神々に育まれているまりもを通して、山々の神、そして湖の神、大自然の神々に感謝する精神を、これからも私たちが伝えていくのが務めだと思っています。

先ほど、しいてはアイヌ文化を根底から支えたといっても過言ではないお祭りだったといいましたけれども、現在では北海道内各地にアイヌ文化保存会とかアイヌ語教室、少人数の活動団体がかなりあるんです。まりも祭りが行われる以前は、差別や偏見から逃れるためにアイヌであるということを隠して、民族衣装を着たり、踊ったりする人たちはほとんどいなかったそうです。

確かに、具体的には阿寒を代表格として白老とか旭川地方の人たちは観光客を相手に踊りを見せたりしまして、この3地域の人たちは「観光アイヌ」といわれて批判され、今でもそう呼んでいる人たちはたくさんいますが、そういう時代に、まりも祭りで堂々と民族衣装を着て、近所に気兼ねをすることもなく踊ったということで、どれほど嬉しかったことかという話が残っております。

まりも祭りが開催されてから数年は、アイヌの人たちの集まりが悪かったそうです。事情を聞くと、阿寒湖までの交通運賃がないということでした。それで、阿寒町の協力を得て、まりも祭りに参加するアイヌの人たちには料金を割引してもらった時期もあったそうです。他の地域の人たちの意見は直接聞いてはおりませんが、地元の方、特に長老の意見を聞かせていただくと、本当に差別・偏見が強くて、着物を着ることもなく踊りも踊らなかったのが、まりも祭りの開催によって、多くの地域に古式舞踊の保存会とかといった団体ができたりして、文化伝承にまりも祭りが大きく影響しているとのことでした。

少ないときは、本当に三十数名の参加者だったまりも祭りですが、平成11年に行われた第50回の記念の年には、300名を超える関係者の皆様にお集まりいただき、大盛況

でした。昔も今もこのまりも祭りにくることを楽しみにしていただいている、本当に伝統的な祭りであると私は自信を持っています。

さて、まりも祭りは、まりもを迎える儀式と送る儀式を2日間にわたって行い、その中で各地から集まっていた皆さんの踊りを披露していただくわけですが、先ほどアイヌの踊りを大きく分けると、奉納舞踊と娯楽舞踊の二つに分けることができるといいましたが、もっと細かく分けると、動物の動きをまねたものとか、仕事を効率的に行うものがそのまま踊りになったものとか、作業の様子がそのまま踊りになったものなど、本当に種々様々です。その中に、「橋渡りの踊り」というのがあります。何度か酒の席で娯楽の踊りとして、阿寒湖畔にお住まいの弟子シギ子さんが歌って、同じく床ヌプリさんが踊ってくれたことがあります。

どういう内容かといいますと、酒に酔った男性が一升瓶が大徳利を抱えて、ふらふらふらふらと一本橋を渡っていくんです。なかなか向こう岸までたどり着かないので、途中で心配になった奥さんだとか恋人だとかが向こう岸から呼ぶわけです。そうして、その女性のところまでやっとたどり着いて、どやされて帰っていくという単純なお話ですが、パントマイム的な踊りで、表現力がとっても必要な踊りです。よく床ヌプリさんが酔って踊ってくれるんですけれども、そのパントマイム的な踊りが実に上手で、表現力の豊かな方なんだなと感心するぐらいです。3分4分ぐらいの時間ですけれども、とっても楽しませていただける踊りです。

それから、男性の踊りの中でも奉納舞踊的なものもありますけれども、代表的な踊りとして「弓の舞」と「剣の舞」があります。「弓の舞」というのは、先ほどご紹介した山本エカシ説では、「昔、ある狩人が山奥に入って一羽の美しい鳥を見つけて、その鳥を弓矢で射ようとするけれども、枝から枝へと飛び移る。その姿が自分に舞を舞ってくれているように感じて、とうとう弓矢を射ることができなかった。村へ帰って村人にその話をして生まれた踊りだ」ということです。

私が「弓の舞」を教えてもらったときには、ただ踊りの形だけを教えていただいたんですけれども、踊っていくうちに、自分の表現方法として踊りの順番を考えて、まず、最初に「鳥を見つける」所作の前 踊りを始める前ですが、「オンカミ」を入れました。「オンカミ」は、左・右・真ん中と挨拶をするように弓を下から上に上げるわけですが、これはまず山に入ったときに、自分がこれから狩りをしますよと山の神に挨拶をする。その後、自分の狩りをする器具を清めるために弓を振るわけですが、そのために地面、地の神様にお払いのようなことをして、次は地上のさまざまな自然の神々に挨拶をするというイメージを持って、踊るようになってきたんです。

中には、山の中に入るから枝を払っているんじゃないかという人もいますが、私としては今いいましたように、山に入ったとき最初に、「これから狩りをします。ですからいい狩りができるように」という挨拶をした後、自分がこれ

から狩りをする器具を清めるための動き、その後、鳥を見つけて射ようとするけれども、舞を舞ってくれているんだというふうに感じて、はっと気づいたときに弓矢を下げて、今度は最初の動きとまったく同じようにオンカミをするわけですが、これは最初とは違う意味で、今度は鳥に対して感謝の気持ちを表現して弓を下げる。それで舞が終わるといのが自分のイメージです。ですから、一番最初のころは踊りの順番だけを教えてもらって、何も考えることなく教えられた通りに動けばいいというような気持ちでしたが、今は自分の心の中の気持ちを表現するように踊っています。アイヌの踊りというのは人によってそれぞれ違うと思えますし、同じ形があっても、それぞれの人の心の内側の表現力だと思えますので、同じ形のものがあっても、それぞれの動きがあると思えます。

「剣の舞」は、昔から刀には本当に悪い神を追い払う力があって、重要な役割を果たしているといわれています。アイヌの刀は、「エムシタラ」という、肩から下げる帯のようなものにつけられています。その「エムシタラ」はつくるのに大変時間がかかります。私はこの「エムシタラ」が大好きなものの一つなんですけれども、実は、この「エムシタラ」は大事な役割を担っておりまして、昔のアイヌの女性は、心配事や相談事などがあるときにはこの「エムシタラ」の神様に打ち明けたそうです。とっても美しいものです。

先ほど、アイヌコタンで小学生や中学生、高校生の皆さんにお話しをしているといいましたが、その中で絶対に外せない部分として差別の問題があります。私自身、ちょっとした差別を高校時代に受けました。実際には中学時代にもちょっとした差別を受けまして、初めてアイヌ民族ということに意識を持つようになったんです。小学生、中学生、高校生の皆さんに講話をするときに、自分の体験談をお話ししますが、私自身が意識を持ち始めたというのは、やっぱり差別というものが一番大きかったわけです。多くのアイヌの人たちも、アイヌというものを意識するのは差別問題からだと思えます。

旭川市には近文というアイヌの人たちが比較的多く住んでいる地域がありますが、そのためか、本当に旭川の人たち自身がアイヌ民族に対して、とても差別意識のある町だなというふうに感じました。こういう土地柄という部分で、

私が生まれ育った阿寒湖畔は、どちらかというといアイヌの町です。その阿寒湖畔から初めて出て高校に通ったときに、土地によって差別という問題があるという事実を初めて感じました。本当にこの差別という問題が、強く自分自身を押しつぶそうとしたときに、助けてくれたのがやっぱりアイヌの人たち。そういう部分で、これから私が自分の子供たちに伝えていくべきものというのは、先ほどいいましたアイヌという誇りと、コミュニケーションのとり方。少しでもお話しすることによって相手の誤解が解ける部分がありますから、少しでもコミュニケーションがとれるようにと、私の子供にも教えていきたいと思っています。